

9

町のむかしと今

1. むかしを今に伝えるもの

わたしたちの学区は、次々に新しい建物が作られ、変化を続けています。しかし、そんな町にもむかしの様子を伝えるものが残っています。



① 宗三寺

② 妙遠寺

③ 一行寺

④ 幸福寺

⑤ 眞福寺

⑥ 川崎稲荷社

⑦ 久遠寺

⑧ 大徳寺

⑨ 観行院・
善光寺別院

① 宗三寺 (そうざんじ)

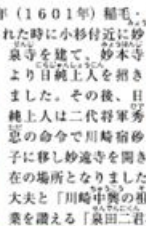
旧東海道にあるこのお寺は、鎌倉時代にこのあたりを支配していたといわれる佐々木高綱の墓があります。

この佐々木高綱という人は、源頼朝の命令を受けて川崎の山王社(稲毛神社)の社殿を建て直したと伝えられています。稲毛神社にある佐佐木神社は、この佐々木高綱を祀って建てられたものです。



② 妙遠寺 (みょうおんじ)

小泉次大夫が慶長6年(1601年)稲毛二ヶ領の代官に任命された時に小移付近に妙泉寺を建て、妙木寺より日純上人を招きました。その後、日純上人は二代将軍秀忠の命令で川崎宿砂子に移し妙遠寺を開きました。その後官前町へ移転し現在の場所となりました。境内には、「川崎の父」小泉次大夫と「川崎中興の祖」と言われた田中休庵の二人の偉業を讃える「泉田二君功德碑」があります。



③ 一行寺 (いちぎょうじ)

寛永8年(1631年)円超大和尚が建てたと言われています。当時は山門の左側に阿彌堂がありましたが戦争の被害を受けてしまい、今は本堂内に大きな新阿彌堂像が安置されて



います。境内には、川崎宿で最初の寺子屋「玉潤堂」を開いた浅井忠良の墓や、旗本紀伊国屋の隠居が名主の稲葉参右衛門を招いて自分の庭園の感想を漢詩に詠んでもらった飯山碑などがあります。



④ 幸福寺 (こうふくじ)

このお寺は慶長6年(1601年)にこの場所に建てられたものです。戦争の被害でむかしを伝えるものはなくなりましたが、



江戸時代の名僧である景海けいみが作った不動明王像があります。これは手のひらほどの大きさですが、武将が戦いの時のお守りとして兜に付けて大切にしていたものです。



⑤ 真福寺 (しんぷくじ)

はじめは多摩川湖畔にありましたが、相次ぐ洪水により新宿しんしゆくに移り、その後戦災や国道



拡張のため今の場所に移りました。昔から眼病を始め諸病に効能があるとされています。境内には、

寛文5年(1665年)銘の庚申塔こうしんとうがあり、阿弥陀如来を主尊しゆそんとしているものの中では、市内で最も古く、最大のものだと言われています。



⑥ 川崎稲荷社 (かわさきいなりしゃ)

今の社殿・鳥居は昭和26年(1951年)ごろ再建されたものです。基礎の土留に二ヶ領用水に架かっていた石積の部分を使っており、



社殿の下には摩の大木の根株が眠っているといわれています。享保元年(1716年)八代將軍吉宗が江戸へ向かうときに、この稲荷社で休息したと言われています。



⑦ 久遠寺 (くおんじ)

天正3年(1575年)什心法印により開かれました。江戸時代には近くにある幸福寺と共に稲毛神社の別宮(守り寺)を務めていました。戦争で消失後、昭和35年にビルマ



のパゴダ建築を取り入れて再建されました。境内には、上野寛永寺の灯籠の台座に使われていた石に最澄の教え「一隅を照らす」の言葉が刻んだ石碑があります。



⑧ 大徳寺 (だいてくじ)

延宝3年(1675年)深登上人が開いたと言われています。境内には、念佛を唱えながら安らかに17歳で往生したと伝えられる依々



木久左衛門の息子常太郎の墓や、「江戸名所絵図」にも描かれ、奈良茶飯で有名であった川崎宿の茶屋「万年」の主人半七の墓などがあります。



⑨ 観行院・善光寺別院

(かんぎょういん・ぜんこうじべついん)

意覚大師が建てたと言われています。本堂の脇には中世の石板碑が置かれています。その中でも薬師如来の板碑は大変珍しいものと言われています。



正面におかれている大黒天像は、触れればご利益があるということで地域の方をはじめ多くの人に覆しまれて



2. 稲毛神社をたずねて

町のもがしさがしをしていると、わたしたちの学校のすぐ近くにある稲毛神社に、もがしを今に伝えるものがたくさんありました。



①御社殿

昭和38年にできた御社殿



②旧御社殿跡

昭和20年4月に戦争で燃えてしまった前の社殿あとの石ひです。



③手水ばち

江戸時代に東海道を旅する人たちが旅籠（旅館）に入る前に手を洗うためにおいてありました。



④進芳千秋の碑

川崎ではじめて市長をつとめ、町の発展のために工場をよんだりした「石井泰助」をたたえた石ひです。



①御神木

空襲（木の年れい）千年以上といわれる「いちょうの木」。大きな戦争で空襲に合い、木の上の方が2～3日間燃えつづけ、焼けてたおれてしまいました。しかし、根は生きていて写真のように下の方からもみきをのばしています。



②鳥居の台になっている石

「川崎宿上町」とあるのは、小川町、砂子2丁目あたりです。「川崎宿下町」とあるのは、今の本町あたりの町の名前です。当時の旅館（旅館）のご主人の名前が彫りこまれています。

大きな戦争のころの稲毛神社

昭和16年ごろおこった大きな戦争によって、稲毛神社も大きな被害を受け、空襲で社殿、古くからの絵や文書がもえてしまいました。

「御神木」もその一つです。もえてたおれた「いちょうの木」には、おもしろい話がのこっています。もえ落ちた「御神木」は、しばらくそのままにしてあったのですが、その大きな木を利用して、まな板やうすを作り町の人にくばったというのです。

そのころ、境内の真ん中に大きな池があったそうです。深さは子どもが背くらいあり、近所の子もたちがつりや魚とりをして遊んでいました。また、戦争が終わったばかりのころは、戦争で両親や親せきを失った子どもたちが50人ほど集まって、お宮の近くにしばらく住んでいたそうです。

（今川氏談）

3. 東海道川崎宿

わたしたちは、東海道川崎宿について、旧東海道にある「砂子の里資料館」^{おひら}の斎藤文夫先生^{ふみお}にお話をうかがうことにしました。斎藤先生は、宮前小学校の卒業生です。川崎宿についていろいろなお話をしてくださいました。

砂子の里資料館 斎藤文夫先生のお話より

川崎宿は、東海道五十三次のうち日本橋から二つ目の宿場です。江戸時代の旅人は、朝日本橋を出発し、登ごろ多摩川を渡って川崎宿に入りました。東海道川崎宿は、約1.5kmの宿場でした。川崎宿は、実は初めからあったわけではありません。徳川幕府が東海道を制定したのは1601年ですが、川崎宿ができたのは1623年と、五十三次の中でも最も遅い時期でした。今は、古い建物などはなくなってしまいましたが、旧東海道を歩いていると、数々の歴史のおもかげが残っています。

わたしたちは、斎藤先生に教えていただいて川崎宿の歴史をたどってみることにしました。

①六郷の渡し跡

1600年に六郷大橋をかけましたが、たびたびの洪水で流されたため渡し場ができました。



②万年茶舗

多摩川を渡ったすぐのところにあつたのが、この万年屋です。とくに奈良茶飯は有名で、疲れた旅人たちが昼食をかねて休けいをとっていました。奈良茶飯は、もともとは奈良のお坊さんが食べていたもので、米・大豆・小豆・かちくりなどをせんじ茶の中に入れ、塩の味付けでいただいたものです。

③田中本陣跡

本陣とは、大名・公家・旗本などが宿泊する施設のことです。田中本陣の主人である田中休庵はニヶ領用水の治水に活躍するなど、川崎宿の建てなおしをしました。





①佐藤本陣跡

川崎宿で一番大きな本陣で、門構え、玄関つきの大きな建物でした。14代将軍家茂が京に上るときにも宿泊しました。



④砂子の風資料館

東海道川崎宿の資料館です。当時を連想させてくれる川崎宿の模型や、浮世絵などが展示されています。



③小土呂橋跡

昔、新川通りには「新川堀」という用水路がありました。そこには、小土呂橋という橋がかかっていました。約280年前、ベトナムからきたゾウが、この橋を渡って江戸に行きました。

わたしたちの学校の近くには、江戸時代の歴史が今もたくさん残されていることがわかりました。みなさんも旧東海道を歩いて川崎宿の歴史にふれてみましょう。



4. むかしの道具

わたしたちの町は、戦争でほとんどの家が焼けてしまい、古くからの家や生活に使われていた道具はほとんど残っていません。そんな中から、ほんの少ししょうがいをします。



石うす

こなをひくのに使われました。



ちゃぶ台とおわん

ごはんを食べるテーブル



おかま

今のように、電気やガスではなく、かまどでの上でつかっていました。底がすみでまっ黒になりました。



ところてんつき



水とう

今と形は同じでも
銅できています



洗たく板



火消つぼ



こたつ

この上に、こたつぶとんをのせて使っていました。



湯たんぼ

この中にお湯を入れて使っていました。



台ばかり



ラジオ

5. 町のうつりかわり

江戸時代以前



かもめいる
砂子のさどに
きてみれば
はるかにかよう
おきつうら風

これは平安紀行の中にある、大田道灌(1477年)の作と言われる歌です。学校のまわりは白い浜がひろがっていました。「河崎」と書いていました。

江戸時代

堀の内村と川崎宿(久根崎、新宿、砂子、小土呂村)として武蔵橘野郡にふくまれていました。



川崎宿は、1623年東海道五十三次の最後の宿場町としてつくられました。その後、田中休墨の力により六郷の

渡舟權を得て宿の財政をたてなおし、町がにぎわうようになりました。

初代歌川広重の東海道五十三次六郷渡舟の浮世絵は、当時の渡しの様子を描いています。

川に近い今の本町あたりを「下町」、砂子2丁目付近を「上町」とよんでいました。

中央保健所の横から、川崎小学校へ行く道路のまわりより、少し高くなっています。むかし東海道だったところです。

明治時代

渡し船や旅人でにぎわっていた川崎宿に、明治5年鉄道が通り川崎駅ができました。しかし、汽車賃が高かったり穴蔵橋ができたりしたこともあり、川崎宿に立ち寄る人は減っていきました。「魚屋、肉屋が一軒もなく、医者も漢方医ただ一人に、三千数百名の生命をたくしていると言う貧困時代が何十年も続いた。」(川崎誌考)と書われています。



ところが、川崎宿(明治22年より川崎町になる。)に鉄道を利用して、大師さまにおまいりにくる人がふえてきました。川崎駅から人力車で大師に行く人もいたそうです。大師新道(明治22年)ができ、その跡に大師電気鉄道もでき、交通も便利になり、少しずつ町は

発展しはじめました。

明治39年に南河原の近くに、横浜製糖という会社ことができました。

多摩川の洪水(明治43年)にあい、ひ害を受けたこともありますが、この工場から川崎の発展を考えたのが初代市長石井泰助です。



明治初めの川崎駅

大正時代

鉄道や川船を使って、原料や製品を運ぶのに便利なことと、そして、多摩川のていぼうをなおしたり、田畑を整理したり、上水道をつくったりして、石井泰助は川崎に工場をよびました。東京電気（東芝）、コロンビア、日本鋼管、鈴木商店（味の素）などの大きな工場が次々とつくられました。工場で働く人や住宅もふえ学校のまわりの様子もずいぶん変わってきました。



川崎町堀之内字宮前新地に大正10年に学校ができたころの地図です。競馬場から富士見公園にかけて、富士ガス^{ガス工場}貯蔵工場がありました。

大正12年(1923年)の関東大震災では人だけでなく、工場も大きな被害を受けました。しかし、次の年、川崎町と大師町、御幸村がいっしょになって川崎市ができました。工業都市として、海辺のうめたて地や南武線ぞいに工場がふえていきました。朝夕、工場へ通う人たちが川崎駅はにぎわうようになっていきました。

昭和の時代

年間川崎駅の利用者数	昭和12年	----	48,000人
	昭和13年	----	78,000人
	昭和14年	----	105,000人
	昭和15年	----	122,000人

富士ガス紡績工場がよそへうつっていったのは昭和14年です。そのころ川崎駅を利用する人は3年間で3倍になっています。

わたしたちの町は大きな工場はなくても、海辺の工場と川崎駅を結ぶところがあるので、川崎に集まる人たちが、物を買ったり楽しんだりする町、そして市役所など公共施設のある町として発展を続けてきました。

町の姿を大きく変えたのは、昭和20年の戦争による空襲です。町全体が焼け野原



昭和19年 電話局屋上から

になってしまいました。

左写真の右側三層建が宮前小の古い校舎です。

下写真左は焼け野原になった町を穴郷橋から見たものです。左中央に昭和12年に鉄筋コンクリートで作られた校舎が見えます。



焼けた町



たちなおった町

発展をつづける町



木造作りの川崎駅

空襲によって市街地の6割は焼けてしまいました。

町に残った人は自分の家や暮らしをたてなおし、町の発展に努力しました。

海岸ぞいの埋め立てたあとに、以前よりもっと大きな石油コンビナートなどがどんでんできていきました。

川崎市の人口

昭和20年	—	約 20万人
昭和30年	—	約 45万人
昭和40年	—	約 86万人
昭和50年	—	約101万人
昭和60年	—	約107万人
平成2年	—	約110万人



昭和40年ごろの川崎駅

それと同じように人口の数もどんでんふえていきました。昭和47年には政令指定都市になり、次の年には人口が百万人をこえました。昭和57年には新しい区もできて7区制になりました。

産業文化会館（教育文化会館）、県立図書館、野球場等わたしたちの町の中心にも文化施設が次々と建設されて行きました。町は工業都市から文化都市へと姿を変えていきました。



昭和40年ごろの航空写真



ミュージア川崎



ラソナ川崎プラザ

工場がなくなった後、川崎駅前にも高層ホテルやデパートがどんどんつくられました。昭和61年には地下街アゼリア、平成になると川崎駅西口にコンサートホールミュージアやラソナ川崎が完成し、川崎市の表玄関として、わたしたちの町はさらに大きく姿を変えていきました。

川崎区では「豊かな生活と自然を育むものづくりのまち川崎区」をめざしてまちづくりを行っています。川崎区には古くから伝わる『ものづくり』の歴史があります。私たちは、昔の人々の思いを受けついで、住みよいまちづくりをしていかなければなりません。そのためには一人ひとりができることを見つけ、行動に移していくことが大切なのです。



JR川崎駅コンコース



川崎アゼリア



川崎市役所 第三庁舎

6. 年表（学校と町のうつりかわり）

西暦	年号	学校のできごと	町のできごと
1921	大正10	神奈川県橋本郡尋常宮前小学校ができる（6月25日に開校式を開く）	
1923	12	校舎をたてなおす	関東大震災がおきる
1924	13	4月に橋本郡川崎宮前尋常高等小学校と改称され、7月に神奈川県川崎市宮前尋常小学校となる	川崎町、御幸村、大師町がいっしょになって川崎市になる
1925	14		多摩川に六郷橋ができる
1932	昭和7	川崎市富士見尋常小学校と分離	
1938	11	一つの教室を午前と午後に分ける二部授業が行われる	
1937	12	川崎市で初めての鉄筋コンクリートの校舎になる 校歌ができる 作詞：市川 竹廣 作曲：堀川 碧	
1939	14		麻生、岡上がいっしょになって今の川崎市の広さになる
1941	16	宮前国民学校となる	太平洋戦争がはじまる
1944	19	戦争のため疎開をする（大山へ）	
1945	20	空襲により10教室が焼ける（4月16日） 疎開児童が引きあげてくる（10月16日）	大空襲で焼け野原となる 戦争が終わる
1946	21	富士見国民学校と統合	
1947	22	川崎市立宮前小学校となる。 学校給食が始まる（1月29日）	
1948	23	宮前小学校PTAが発足される	
1951	26	30周年のお祝いをする	川崎球場でプロ野球が始まる 川崎競馬場ができる
1952	27	火事で木造校舎が燃える	NHKのテレビ放送が始まる
1957	32	宮前子ども新聞第1号ができる	
1958	33	プールができる	
1959	34	新しい校歌ができる 作詞：数田 義雄 作曲：山田 耕祐	
1981	36	講堂（体育館）ができる 宮前小PTAだよりがはじまる	
1984	39		市役所前で東京オリンピックの聖火リレーがおこなわれる
1985	40	子どもの広場や雑木山ができる	
1986	41	PTAより校旗がおくられる	
1987	42		産業文化会館（教育文化会館）ができる

西暦	年号	学校のできごと	町のできごと
1971	昭和46	50周年のおいおいをする 運動場をアンツーカーにする	
1972	47		川崎市が政令都市になる 区制がしかれ5区に分かれる 青少年科学館ができる 人口が100万人をこえる
1973	48		
1976	51	新校舎落成記念式典をする	
1977	52	自然園「みやまえ」ができる	八ヶ岳少年自然の家ができる
1978	53	競輪場でマラソン大会をする	第一回市民祭りがおこわれる
1979	54	宮前なかよし園ができる	
1981	56	60周年のおいおいをする	
1982	57		5区から7区になる（宮前区、 麻生区が加わる）
1984	59	科学技術庁長官賞受賞 PTA文部大臣賞受賞	
1985	60	体育館が新しくなる	
1986	61		川崎駅前地下街「アゼリア」が できる
1988	63		市民ミュージアムができる
1990	平成 2	新しい校舎ができる	
1991	3	70周年のおいおいをする オープンスクール第一回研究報告会	
1992	4	阿波おどり大会に子ども連が出席 老人ふれあい給食会	川崎市平和館ができる 川崎マリエンができる
1993	5		ハローブリッジができる
1994	6	新しい教育目標ができる 花がいっぱい 笑顔がいっぱい 活気がいっぱい	
1997	9		東京湾アクアラインができる
1999	11		岡本太郎美術館ができる 川崎球場が幕を閉じる
2000	12	80周年のおいおいをする	
2001	13		川崎市子どもの権利に関する条 約ができる
2003	15	わくわくプラザが開かれる	川崎市子ども夢パークができる
2004	16		ミュージアム川崎ができる
2006	18		ラゾーナ川崎ができる
2007	19	二学期制になる	アメリカンフットボール川崎大 会が開かれる
2008	20	全国学校体育研究最優秀校受賞	
2010	22	90周年のおいおいをする	

資料を提供して下さった方々

宗三寺	妙遠寺	久遠寺
一行寺	幸福寺	観行院・善光寺別院
真福寺	大徳寺	川崎稲荷社
稲毛神社	斎藤文夫氏	金岩男夫氏
銀柳街	仲見世通り	東田商店街
砂子通り	たちばな通り	駅前大通り
平和通り商店街	稲毛通り	川崎銀座
市立川崎病院	新川橋病院	川崎市体育館
南部公園事務所	アゼリア	川崎球場
川崎さいか屋	岡田屋モアーズ	マルイ
川崎日E	ダイス(DICE)	川崎ルフロン
三井管理組合	郵便事業会社	県立図書館
川崎中央支所	川崎市役所	三藤哲也氏(末広庵)
川崎信用金庫	湖見台浄水場	入江崎水処理センター
川崎警察署	川崎消防署	

職員名簿

<平成22年度職員>

白川 藤幸	佐川 恵子	尾崎 具之	○原 菜津美
○白川 摩美香	高山 一志	○菊地 里紗	○原田 嘉昭
馬場 誠三	原田そのみ	川島 良子	岩崎 由理
徳永ゆかり	中尾 菰	鈴木 亜弥	○木田 祥子
櫻井 泰子	田谷 麻衣	塩谷あゆみ	○毛塚 潤子
井戸さや花	○井上美紀子	古山 大介	○上原 和美
佐藤 映子	大野 友理	園吉 浩司	吉川美智子
金内 俊之	齋木 智子	大岩 広伸	○古瀬 優光
田辺 徹馬	牧野 宏昭	富田 登子	赤池 智恵
稲満 景子	田代 和美	○齊野 保史	小野日出子
田中 潤	青木智寿子	原田 博	○副読本部

<平成21年度職員>

小泉 英夫	中村 隆博	鈴木 睦	森 六葉
吉永 清香	小平 容子	篠原 愛子	岡田 敏宏

あとがき

教頭 佐川 恵子

大正10年2月17日、川崎の宮前町に新しい学校がうまれました。わたしたちの宮前小学校です。木でつくられた校舎には、今と同じように元気な子どもたちの声がひびきわたっていたことでしょう。それから90年の月日がたち、12000人以上の子どもたちがこの宮前小学校を巣立っていきました。文字で書くとたった三文字の「90年」ですが、その間には、わたしたちが数えきれないほどの様々なできごとがあったことでしょう。そして、想像のできないほどの大きな想いがとぎれることなく受けつがれてきたのだと思います。

この「みやまえ」には、学校や地域の今やむかしのことがとてもわかりやすく書かれています。この本をたくさん見たり読んだりしてください。そして、もっと知りたいな、と思ったことを調べてみるのも楽しいと思います。

「みやまえ」は、地域の多くの方々のご協力によってつくられました。ここに厚く感謝もうしあげます。

創立90周年記念

副読本 **みやまえ**

発行日 平成22年11月20日

発行 川崎市立宮前小学校

印刷所 株式会社 千代田BP

TEL. 044-299-2919

表紙の題字／斎藤文夫氏筆
航空写真／関フォトスタッフ